

2011.10.15 / Vol.35

1880年代教育史研究会 ニュースレター

第 35 号

目 次

[連載]

- 神辺 靖光 「学校をめぐる逸話と風景(9)
佐久間正節と訓蒙学舎のこと」…………… 2

[個人研究]

- 田中 智子 「「分校」の思想」…………… 3

[教育史学会コロキウム]

- 富岡 勝 「コロキウムの概要」…………… 5
谷本 宗生 「コロキウム(10・2)を終えて」…………… 6
小宮山道夫 「コロキウムに参加して」…………… 7
荒井 明夫 「教育史研究における1880年代研究についての
二・三の断想」…………… 9

[近況報告]

- 富岡 勝 「熊本における木下家関係史料の動向」…………… 10

- [お知らせ]…………… 12

[連載] 学校をめぐる逸話と風景 (9)

佐久間正節と訓蒙学舎のこと

神 辺 靖 光

1880年代の学校をめぐる逸話と風景（人々が動き廻る様子が見える想い）を書こうと筆をとった。最初に1882年に創立した東京専門学校^{東京専門学校}の裏話を書いた。次に高橋是清と共立学校のことを書いた。現在に続く学校が人々の前に姿を現した典型と思ったからである。しかし、それより20年前、即ち幕末と言われる頃から^{まなびや}稽古所とか、^{まなびや}学舎とか、郷学とかいう学校の塑像のようなものが、やたらにできた。その塑型の一つとして60年代の品川県郷学校を眺めてみた。これから、しばらく60年代～70年代の雛鳥のような、か細い学校の浮き沈みをみよう。

司馬遼太郎の『坂の上の雲』第1巻に元旗本等佐久間正節の邸が出てくる。後の連合艦隊参謀・秋山真之が故郷から状況して、兄の騎兵士官・秋山好古と同居する屋敷である。江戸城の西方、外濠近くの麴町土手三番町にこの屋敷があった。このあたり一帯は旗本屋敷がびっしり詰っていた。「安政再版・東都番町大絵図（切絵図）」をみると市ヶ谷御門のすぐ南に、なるほど佐久間邸がある。芝居の番町皿屋敷も近い。現JR市ヶ谷駅の外濠反対側である。この小説の作者のこのような考証の正確さには感心するが、小説にもテレビドラマにも佐久間正節という人間はでてこない。実はこの佐久間は東京大学の前身・開成学校のそのまた前身・第一大学区第一番中学のドイツ語の先生だったのである。

明治3年正月、佐久間は大学南校に入ってスイス人カデルリーからドイツ語を習った。大学南校の生

徒は各藩からの貢進生が多かったと言われるが、佐久間のような元幕臣もいたのである。ほどほどにはできたのだろう。3年9月には准少得業生になり、4年7月には文部省権少助教になった。

明治5年8月、南校は第一大学区第一番中学になった。中学長の辻新次は突然、一番中学内に訓蒙学校という私学をつくると言って佐久間を、この学校のドイツ語教師にした。そして、外8人の教師を任命してフランス語、数学、和漢学を分担させた。この教師達はどういう訳か、みな旧幕臣である。そして訓蒙学舎の社中（今で言えば学校法人理事）は辻以下一番中学の教師であった（明治六年・私学開業願）。

辻新次の回顧談に次のようなことがある。南校は外国語を教える学校で大勢の外国人教師を雇っていたが、外国人の教え方ではどうしてもわからない生徒がいた。そこで生徒の中でできる者に教えさせた。前にあげた准少得業生や権少助教などあやしげな肩書はそれではないかと思う。外国人教師が教える生徒を正則生、日本人教師が教えるのを変則生と南校では言った。後に神田乃武らがたてた正則英語学校は外国人のように発音が正しいという意味で、南校の用語を引くものだが、当時、正則・変則はいろいろな意味で使われているから注意を要する。

さて、南校では、できない変則生をもてあまし、これをやめることにした。しかし変則生をほうり出すのは可哀そうだと思った辻新次学長は町田久成、

佐原純一と相談して神田美土代町に共学舎という私学をつくって変則生をそこに移した（国民教育奨励会『教育五十年史』所収）。共学舎は私立外国語学校として明治10年頃まで続いた。一番中学内にできた訓蒙学舎も同じ手のものではなかったかと思う。南校から続いた一番中学も各藩選抜の貢進生が多かった。中には外国語にどうしてもなじめず、発狂したり、嘆いて切腹した者まであったが、一般に成績はよかった（唐沢富太郎『貢進生』）。これに対し、佐久間のような旧幕臣でもぐり込んだ生徒は外国語が苦が手だった。佐久間が南校に入ったのは31歳、他の旧幕臣生徒も老書生ではなかったか。因みに幕末に外国語をやった幕府の蕃書調所も、勝海舟の海軍塾も藩士が多く幕臣は少い。

さて訓蒙学舎である。正則についてゆけない生徒を教えた。いわば補習学校である。一番中学は明治6年4月から開成学校（専門学校）に昇格した。訓蒙学校は依然として開成学校校内にあったが、6年11月には牛込横寺町に分校をつくり、社中を訓蒙学校教員に替え、佐久間正節が校長になったので人気の高い英語を教えた。生徒は40～50人ほどであった。

訓蒙学校が分校をつくった時は開成学校が寄宿舎を新築した時であるから体良く追い出されたのである。かくして一番中学内の補習学校は私学訓蒙学校になったのである。このことは正史『東京大学百年史』にはない。筆者が東京府文書のいくつかを繋いで考えた筋書きである。

[個人研究]

「分校」の思想

田中 智子

最近、あらたに同志社「分校」の研究に着手した。年報第三号で扱った「東華学校」は、新島襄により「同志社分校」と位置づけられていたが、アメリカン・ボード宣教師や新島と関わった各地での私立英学校設立の動きは、森文政期に活発化していた。仙台の他、泰西学館（大阪）、薇陽学院（岡山）、熊本英学校、北越学館（新潟）が現実に誕生しているのみならず、福井でも「英語専門学校」（あるいは「同志社分校」）設立の動きがみられた。

同志社「分校」と実際に名乗ったことを確認できているのは、仙台と福井の事例のみであるが、同志社「分校」を分析概念としていかに定義するか、そ

のとき上に挙げた各地の私立英学校はその定義にあてはまるのかどうか、考えているところである。各学校の実態研究を進めると同時に、埋もれた同種の動きがないかどうか、史料発掘に取り組んでいくつもりである。

ところで、この「分校」という語句が19世紀日本において、誰によってどのような文脈で使われていたのか、同志社「分校」問題を考える前提としておさえておく必要がある。

これまでの研究に近いところからいえば、第三高等学校の前身校として、1885年7月から翌年4月に高等中学校に改組されるまでの短期間、大阪に存在

した「大学分校」がある。東京大学に対応するものとしての「分校」の呼称であることはいうまでもない。宣教師らの用語において、同志社の「分校」は、“Feeder”（＝「供給装置」の意味を内包する）と表現されることも多かったが、この「大学分校」が“Feeder”と表記された例にはまだお目にかかったことはない（“Branch”との語句には出会ったことがある）。「大学分校」と「東京大学」との関係について、カリキュラムや人材の面から、再検討する必要があると感じる。

一方、慶応義塾「分校」の存在は、同志社よりも広く知られるところではないだろうか。時期は同志社「分校」に先立つ明治初年、1873年から翌年にかけて、「分校」が大阪・京都に設置され、大阪のそれは、1875年に徳島「分校」として移転した。教員が東京の本塾から出張していることや、生徒の本塾一分塾間の移動は「勝手たるべし」との規定だったことから、慶応義塾の「分校」とは、東京本塾の「分

教場」とでもいうべき性格のものであったのではなからうか。この点、後年における京都の同志社と各地の私立英学校との関係とは少々異なると感じている。

現在、筆者が認識できているのは、上記二例、①大阪の官立「大学分校」②慶応義塾「分校」のみであるが、寡聞にして知らない「分校」（実例・用語ともに）が多くあることと思われる。是非ともご教示たまわりたく、ここに一文をしたためた次第である。西洋の教育事情に詳しい福沢や新島が「分校」の語を使用するとき、念頭に置いていた各国の教育システムがあるのかどうかということも、今後検討していきたい。

なお、この問題に関わる全体的スケッチとでもいふべき論文を、「明治中期における地域の私立英学校構想と同志社」（『キリスト教社会問題研究』第60号）として本年12月に公表予定なので、いずれ御高覧いただければ幸いである。

[教育史学会コロキウム]

コロキウムの概要

富岡 勝

2011年10月2日の教育史学会第55回大会(於京都大学)において本研究会で実施したコロキウムの概要を、教育史学会会報に投稿したコロキウム開催報告を転載することで、ごく簡単に紹介しておきたい。

谷本会員・小宮山会員による記事に当日の指定討論者の指摘内容や議論や内容が詳しく紹介されている。また荒井会員からは当日の議論に関する感想が寄せられている。これらの記事もぜひご覧いただきたい。

 <教育史学会会報への報告内容>

「近代日本におけるエリート教育の編成 一明治期と大正期との対話」と題したコロキウムを、30名近くの会員の参加を得て開催することができた。荒井明夫会員(大東文化大学)の司会により、小宮山道夫会員(広島大学)の報告「エリート教育再編に関わる一八八〇年代研究の現状—『一八八〇年代教育史研究年報』記事を中心に—」、大正期の関連テーマを研究する吉川卓治会員(名古屋大学)と小針誠会員(同志社女子大学)の2名の指定討論者からのコメント、および全体討論が行われた。

小宮山会員は、『一八八〇年代教育史研究年報』第1号・第2号・第3号(2009年～2011年)などで公表された研究成果を、「制度構想」「制度受容」「関係人物」「教育内容」「生徒動態」「周辺史料」の6つのアプローチから研究成果と課題を報告した。

この報告に対して、著書『公立大学の誕生 近代日本の大学と地域』(名古屋大学出版会、2010年)において大正期以降の「大学と地域」について考察した吉川会員は、田中智子「府県連合学校構想史試論 一八八〇年代における医学教育体制の再編」(『一八八〇年代教育史研究年報』第

1号、2009年)に注目し、「1902年や1918年の史料においても府県連合学校のような構想が見られるので、1880年代以降の府県連合学校構想についても明らかにする必要がある」ことなどを問題提起した。

もう1人の指定討論者の小針会員は、著書『〈お受験〉の社会史 都市新中間層と私立小学校』(世織書房、2009年)で1920年代から1950年代における都市新中間層の私立小学校入学志向と入学選抜に関する歴史社会学的な分析を行った立場から、「1880年代という狭い時期を研究対象として扱うことの意義は何か」「高等中学校を研究対象とすることの意義は何か」「この共同研究で議論の対象とする「エリート」とは何を指し、どのような方法でそれを分析するのか」といった研究テーマの根幹に関わる問題提起を行った。

このコロキウムは、「一八八〇年代における高等普通教育と専門教育の再編」というテーマに、2010年度からは科学研究費(基盤研究(B))「一八八〇年代におけるエリート養成機能形成過程の研究—高等中学校成立史を中心に」、代表者荒井明夫)の交付を受けながら取り組んでいる一八八〇年代教育史研究会の活動を、「異なる時期を扱っている多くの会員との対話を通じて検証したい」という意図で企画した。上記のような指摘や問題提起を受けることができたのは大きな成果である。しかし企画者側の準備不足により、会場での討論を深められなかったこと、若手会員を含む参加者から十分意見をいただくことができなかったことが大きな反省点である。今後、本研究会のニューズレター(研究会HPでも公開)、研究年報そして教育史学会での活動などを通して少しでも補っていきたい。

 以上

[教育史学会コロキウム]

コロキウム (10・2) を終えて

谷本 宗生

京都大学で開催された教育史学会において、東北大学の大会以来、本研究会としてのコロキウムを催した。企画オルガナイザー：富岡勝さん、司会：荒井明夫さん、報告：小宮山道夫さん、指定討論：吉川卓治さん(名古屋大)、小針誠さん(同志社女子大)。本稿筆者(谷本)に与えられたミッションは、指定討論者の1人を務めた吉川さんの論点と問題提起を簡潔に纏め、会報ニューズレターに記録として残すことである。

吉川卓治さんは、精力的に欠かさず、この間業績をあげている田中智子さんの一連の研究に注目した。後藤新平による府県連合医学校構想が、高等中学校の連合支弁制へ流入していく過程を解明した点を評価する。(1) 1887年の勅令48号は、高等中学校への地域負担を優先的にもとめたものである、(2) 高等中学校制度自体の流動的な曖昧さが、区域内府県委員会の役割を認識させたこと。また「誘致」という枠組みにおいて、80年代の市町村制による市の登場によって、府県とのズレ(対立的性質)を生じる可能性を吉川さんは評価する。一枚岩であったとする学校誘致のイメージとはかなり異なる点といえる。

1880年代研究の成果と意義を強調、評価しながらも、吉川さんはいくつかの問題提起も示された。まず府県連合学校構想の行方をどう捉えるのか。たと

えば、1902年の『二六新報』で記された文部省の学制改革案の動き、1918年の雑誌『日本及日本人』に掲載された西田卯八(地理学)の高等教育機関拡張整備の構想などがあり、1880年代の「官立」高等中学校制度以降の動きをどうみるか。次に、久木幸男も訓令12号の評価をめぐって指摘した「国家教育権」(国家が教育の総ての機関を経営)の思想と、いかに関連するのだろうか。

さらに、1940年代の公立医学専門学校の増設過程と対比するなかで、地域固有の課題やその取り組みがどう展開されたのかどうか。高等中学校制度の専門部構想にも、吉川さんが指摘するような要素(地域にとっての専門教育)が多分に含まれていたのではないかと筆者は想像する。1900年代以降、医学専門学校が分化独立する点にも相応の意味があると考ええる。最後に、後藤新平の府県連合医学校構想自体は相応に周知されたものである点を踏まえ、先行研究のレビューなどを論文化の際に十分行うことを注意喚起された。会員間同士のニューズレターの扱いと、広く読者を想定する研究年報の取り扱いについては基本的に異なる点を筆者谷本自身も自覚したといえる。

時間的な都合もあって、上記のとおり挙げられた吉川さんの重要な指摘・論点は、残念ながら当該者である田中さんらも交え十分に質疑応答できなかった

た。まして、コロキウム会場に参加された方々の意見・感想もまったくうかがうことができなかったのは反省点である。学会の規定時間内では、それもむづかしい運営であることは想像される。会場参加者の質問や意見、感想を後からでもなんらかの形でうかがうやり方、手段方法を想定しておくことが必要であったかと後日談として感じる。参加者の氏名明記や研究会のホームページ欄への書き込み投稿など、今後を踏まえた方策をいろいろ検討したらよい

と思われる。

最後に、吉川さん小針さんの指定討論者、会場に参加してくれた方々に会の一員としてお礼を述べた。そして東北大大会、京都大会を踏まえ、数年後にはできればコロキウムか共同研究発表かを問わず、大きな物語や見取り図とまではいわないまでも、到達した研究の成果や課題を相応に示し、批判を仰ぐ形を設けたいと願っている。

[教育史学会コロキウム]

コロキウムに参加して

小宮山 道夫

コロキウム参加者の皆さんはご存じのとおり、筆者の場合、報告だけで精一杯であったが、指定討論者のひとり小針誠氏からのコメントに関してを中心に感想を書くようにとの事務局長からのご厳命により、若干のメモをお届けする。「若干のメモ」としたのは、広島帰着以来なかなかじっくりと腰を落ち着かせて感想に取り組む時間がとれなかったことに対する単なる言い訳であり、同時にいい加減な感想を寄せることによって小針氏に対してはたらく失礼をお詫びしてのことである。

小針氏からは当研究会の活動に関して、「1880年代」、「高等学校」、「エリート」の3点からご指摘を頂いた。

まず研究対象として1880年代という狭い時期を扱うことの意義に対する素朴な疑問である。これは小針氏のみに限らず常に当会に対して寄せられる疑問でもあるが、小針氏が表現するように1880年代は

「近世から近代の完成に向けての過渡期」であり、『近代国家』の成立が国民意識・国家意識の高まりとの関連で確立されつつある時期、あるいは『国家』が権力の発動とともに明らかになり、多くの『国民』が次第に『国家』の存在を認識する時期だといえよう。その時期を対象とすることの意義は、やはりそのような時代認識であるからこそ肝心なのは、地域での近代国家(=近代教育)の受容実態であり、青年たちが、あるいは府県や地域社会がどのように教育を利用しようとしたかという事実の解明である。それは尋常中学校や高等中学校の生徒が定量的に輩出されるようになる1890年代後半以後では解明できない問題であると考えている。

次に高等中学校を研究対象とすることの意義についての疑問として、個別史実の集積によって高等学校研究として何を明らかにできるのかという指摘を頂いた。確かにこれは共同研究の難しさ、個別学

校史研究の難しさともリンクする重要な指摘であり、我々は常に調査や論述の上で念頭に置かねばならない疑問であろう。しかしその一方で、高等学校発達史の通過点として分かりきっているように思われている高等中学校研究が、実はその政策意図から、制度受容過程から、キーパーソンから、教育実態からと、分からないことだらけであったことも事実である。このため近代日本の進学ルートの形成というアーティキュレーション確立過程を、従来のように旧制高等学校に直線的に結びつけ、明治政府、特に森有礼の豪腕の手腕によってルールが敷かれたと理解してしまうことは、歪んだ歴史認識と言わざるを得ないだろう。文部省自体からして小さな役場であるし、本当に政策を「主導」できるほどであったのかは疑問である。その際、尋常中学校から帝国大学へと続く進学ルートの形成と、地方の専門教育機能とを併せもたされた高等中学校がどのように機能していったのか、という点、とくに意図した機能と結果として得た機能との位置づけの間には大きな違いがあるはずである。この点を解明し、当時の中・高等教育再編過程の実像を明らかにすることが筆者の理解する高等中学校研究の意義である。

最後に我々が提示した「エリート」概念への疑問。曖昧な回答となってしまいが、前提としてはやはりいわゆる「学歴エリート」である。しかし言わば学歴エリートを生み出す構造が形成される以前の話であり、教育社会学において明治後期から大正期にかけてと見積もられている学歴エリート形成は、もう少し前の段階から歴史的検証を行う必要があるというのが筆者の立場である。第3号掲載の拙稿において、高等中学校生徒の入退学分析し、この点に迫ろうとしているが、教育内容の部分とアウトプットの部分については未着手であることは否めない。大きな課題を頂いた心地である。

以上、お忙しいなか我々のニューズレターの端々まで熟読され、対話のために話題提供をして下さった小針氏の疑問に対し、コロキウム時間内でも、この場においても十分に応えることができない点をお詫びしたい。小針氏にとって対話とはならなかったであろう点が甚だ気がかりではあるが、少なくとも当方にとっては研究の基幹部分を問い質して頂いた意味で意義ある対話の機会を得ることができた。深く感謝したい。

[教育史学会コロキウム]

教育史研究における1880年代研究についての二・三の断想

荒井明夫

教育史学会第55回大会は、非常に知的刺激に満ち溢れた大会であった。全体的な印象は別途教育史学会の『会報』に原稿としてまとめたのでそちらを参照していただくことにして、コロキウムの報告・コメントを聴く中から我々80年代教育史研究会の今後の研究活動について私見をまとめたい。

先ず最初に、コロキウムの司会を務めて非常に後悔したことがある。時間がなかったとはいえ、参加者の自己紹介と参加動機くらい交流があってもよかったという点だ。コロキウム会場に足を運んでくれた方々は、教育史学会おなじみの顔（いつも紀要の売り子を務めている）も勿論みられたが、多くはお名前を存じあげない若い研究者であった。その事実は驚きであり喜びであった。自己紹介くらいやれば良かったと思う。

さて、コロキウムだが小宮山報告および吉川・小針コメントは大変刺激的であった。小宮山報告は、高等中学校に対するこれまでの我々の研究を総括し、その方法論的特徴として制度構想・制度受容・人物・教育内容・生徒動態・1880年代の政治文化社会的背景などを指摘した。この提案は、今後研究を絞りこむ上での有効な視点であるように思われる。次いで吉川卓治氏および小針誠氏によるコメントがあった。両コメントともに、高等中学校の社会的性格を多面的に浮き彫りにする内容であった。吉川コメントは主として地域との関係性において、小針コメ

ントは主として高等中学校の社会的機能について、それぞれ多面的にコメントされた。

私は、お二人のコメントを聴いて「研究会内部だけではなく外部の研究者にも課題が共有されつつある」という印象をもった。勿論、お二人が御多忙な中をコメンテーターをお引き受け下さり、さらに我々のニューズレターおよび『研究年報』を丹念に読み込んだ上にコメントを準備されたからこそ、我々と研究課題を共有され、研究深化の視点を提示されたと思う。あらためてお二人に御礼申し上げたい。

同時に、そうした研究課題の共有化は、恐らく10年・20年前にはありえなかつただろうということである。15年ほど前、高等中学校研究について「帝国大学との接続のみを強調する社会的機能だけではなく地域社会の視点から捉え直す必要があるのではないか」とある研究会で発言した。その際、ベテラン研究者から「そんなことをまじめに考えているのか」と言われたことがあった。それだけに研究課題が共有化されてきたことは感慨深いものがある。

話が変わるが、今回の教育史学会大会におけるシンポジウムにおいて指定討論者の羽田貴史氏が「教育史研究者はもっと自分自身で現状分析すべきである」旨発言された。氏は、これまで何度となく教育史研究(者)の社会的責任について言及されてきた。その意図を理解した上で主張には賛成するが、しか

し「現状分析をおこなうことと教育史研究の課題意識」とはやはり異なると思うのだ。我々は羽田氏の問題提起を、敢えて受け止めたい。深く捉えたい。

我が1880年代教育史研究会に即して羽田氏の問題提起を受け止める時、より具体的にいえば、「1880年代教育史通史の書き換え」の次に何が来るかという問題である。我々の1880年代研究の基本的スタンスは、森文政の捉え直しにあった。森文政を、1880年代教育政策を機軸としつつ中央と地域との関係構造の転換の中に位置付ける中で再評価を試みるというものである。だがさらに我々の問

いは続く。すなわち、森文政の捉え直しはどこに続くのか、ということである。それは1890年代の再評価に連なるように思うのである。コロキウムの最後に「天皇制国家」をどのように捉えるかという大問題が浮上した。近代国家が天皇制国家として成立した（1890年代）という事実を、我々は射程に入れて検討しなければならない。

80年代教育史研究の道のりは、未だ未だ続く長い道のりとなりそうである。だからこそ、一つ一つ着実に成果を明らかにしていかなければならないと思うのである。

[近況報告]

熊本における木下家関係史料の動向

富岡 勝

前回につづいての近況報告として、本号では研究年報に執筆している木下広次に関連する史料のことを書きたい。

今年の8月ごろ、研究年報第三号の原稿に四苦八苦しているときに、木下広次の評伝を書かなくてはいけないことも思い出して熊本県立図書館のOPACで、「木下広次」を検索してみたら、木下広次による「在仏雑記」（明治9年）という史料が所蔵されていることがわかった。だいぶ以前に熊本県立図書館の蔵書を大学図書館経由で現物貸借してもらったことはあったが、同館のOPACでこんな重要な史料にたどり着けるとは意外であった。

OPACなどでもう少し調べてみると広次の叔父にあたる木下助之（1825～1899、熊本県初代県議会議長・玉名郡長・衆議院議員）の史料が熊本県立図書

館に寄贈されており、そのなかに広次の「在仏雑記」も含まれていたと推測される。

司法省法学校で学んでから1875年（明治8）よりフランスに留学した広次の留学中の様子を伝える願ってもない史料と思われたので、教育史学会終了後の10月14日に熊本県立図書館を訪問してきた。

この「在仏雑記」については、今年度中に近畿大学の紀要でくわしく紹介してみたいと考えているが、熊本県立図書館に行ってさらに驚いたことがあった。

同館に隣接して熊本近代文学館があり、ちょうど10月か展示「熊本城下の青春 幕末・明治編」が始まっていたが、この展示のあいさつ文で「幕末の儒者木下鞆村の関係史料が一括して県立図書館に寄贈されたことも今回の企画のきっかけになりました」と書かれていたのである。

木下鞆村(1805～1867)は、広次の父親で、井上毅・竹添進一郎・木村弦雄・古荘嘉門らを教えたことで知られる熊本藩時習館の儒学者である。寄贈史料の一部が展示されただけであり、一般公開はされていないが、整理が終了したら公開されるという。鞆村の史料をくまなく調べれば、広次についての有力な手がかりが得られる可能性がある。

こればかりでなく、この熊本近代文学館の展示を企画した井上智重館長にお会いすることもでき、12月2日の同館のロビー講座「木下家の人々」(話し手:井上智重氏)には、史料を寄贈した木下家の方もいらっしゃることを知った。同館長は、「木下家の研究は、これからがおもしろくなります」という旨をおっしゃっていた。

また展示では木下家の系図も示され、その解説パネルには、以下のような記述があった。

ここに一枚の家系図を示したい。幕末の儒学者木下鞆村(通称真太郎、別号犀潭)を出した菊池の木下家と劇作家木下順二を生んだ玉名伊倉の木下家の二つの幹からなり(略)この複雑に入り組んだ家系図を眺めると、熊本の近代の風景が彷彿として浮かんでくるはずだ。(略)生家のある今村にも私塾古耕精舎を設け、弟の梅里が引き継ぎ、伊倉木下家の養子となった弟助之や息子の廣次(京都帝国大学初代総長)はここで学んだ。

鞆村は論語を基本にしながらも、西洋の学問を否定せず、「馬引きに非ず、牛駆りたるべし」として生徒の特性に任せて訓育し、慶応三年(一八六七)に没した。

こうした解説だけからも、様々なヒントが得られそうである。

鞆村の史料が熊本県立図書館に寄贈されたという情報自体は、実はインターネットでも入手可能であった。2011年11月3日付けの「幕末の儒学者・鞆村の史料寄贈 県立図書館へ」というタイトルで「幕末に生きた熊本藩の儒学者、木下鞆村 [いそん] (1805～1867) の日記や書状など史料約100点を、子孫の(略)が県立図書館に寄贈した」と報じた記事を、『熊本日々新聞』のサイト「くまにちコム」で閲覧できる。しかし、今回熊本に行かなければなかなか気がつかなかっただろうし、熊本近代文学館の展示を見ることも館長にお会いすることも出来なかったであろう。

書こうとして動くことで「史料が近づいてきてくれる」ということがあるのだろう。逆に史料が見つからないからといって書くのを遅らせていたら、ますます史料が見つからず、書けない。そんな当たり前ともいえることに、ようやく気がついた。

[お知らせ]

・次回例会について

メールでもお知らせしましたように、次回の例会は、12月18日(日)に東京高円寺の神辺邸で開催します。

内容は、ニューズレターの合評会、今年度の研究の中間報告、今後約1年間の研究テーマについての協議です。

「今後1年間の研究テーマ」というのは、前回研究会での荒井代表の提案にあった研究書出版を考えると、来年10月発行の研究年報第4号にむけて、何をどこまで書くのか、ということが重要になるからです。研究会としての方向性と、各班・各個人としてあと1年間で何を研究するのかについて今の時

点でもう一度率直に話し合い、次々回(来年2月ごろ?)で決定ということになればよいかと思います。ご欠席の場合も、「あと1年間で何を研究したいか」をA4で1頁または0.5頁ぐらいの簡単なレジюмеを研究会の前々日までに事務局(富岡)まで送ってください。

・ニューズレター36号の締切日のご案内

年間4号発行するというペースですので、次の締切りは2011年12月31日(土曜日)となります。奮ってご投稿をお願いします。

「1880年代教育史研究会」ニューズレター 第35号 2011年10月15日発行

<研究会連絡先> 「1880年代教育史研究会」事務局 富岡 勝
〒577-8502 東大阪市小若江3-4-1 近畿大学教職教育部 富岡勝研究室気付
<E-mail> tomiokamasa@kindai.ac.jp
<HP> <http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/1880/>

<原稿送付先> 鄭 賢珠
〒606-8172 京都市左京区一乗寺河原田町37-1-413
<E-mail> hyunjjung4@hotmail.com